

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



中村宏（一九三二／昭和七）
〈総銅製機甲本イカルス〉
一九七三（昭和四十八）年
銅板、銅凸版
三〇×二一×八・五cm
テキストは稲垣足穂による
原研太郎氏寄贈

文字通り重厚な、銅製の書籍型の作品である。重量はなんと二十キログラムを超える。中村宏は浜松市出身の画家で、戦後、「ルポルタージュ絵画」によって頭角を現した。それ以降も、当館も所蔵する「車窓編」等の様々なシリーズを発表し、絵画という表現に迫った。工業分野で機械カタログの編集レイアウトに携わっていた中村は、製版に用いられていた銅凸版自体を作品にすることを着想し、「銅凸画」と名付け、一連の銅凸版の作品を制作した。本作を展開すると表紙を含めて全一四頁になり、そこに稲垣足穂の短編小説「イカルス」のテキストと中村の画が掲載されている。銅凸画の中でも、本作は書籍の形態をとった希少な作品である。

（主任学芸員 植松 篤）

No.
137
2020年度 | 春 |

追悼五代目館長芳賀徹先生

館長 木下直之

本年二月二十日に芳賀徹前館長がお亡くなりになりました。八十八歳でした。

芳賀先生は二〇一〇年から十七年春まで当館の五代目館長を務め、三年前に、六代目のバトンを私に渡してくださいました。声を掛けていただいた時、まだ大学に勤める身でしたから、定年まであと二年待つて欲しいと訴えたのですが、待てないと即答されお引き受けした次第です。我が故郷静岡からの依頼を無碍にはできないという思いもありましたが、それ以上に、渡されるバトンを先生が七年にわたって握りしめていたことが大切でした。

それで『アマリス』一二六号への最初の寄稿を「二、三の初仕事について」と題し、芳賀先生の手書きの、おそらくはガリ版刷りだった論文「高橋由一と司馬江漢」(『蘭学資料研究会研究報告』第一四七号、一九六三年)を紹介しました。この時、先生は三十二歳、私は九歳、もちろんリアルタイム

で読んだはずはなく、高橋由一という画家が気になり始めた一九八〇年代後半にコピーしたのだろうと思います。

しかし、先生にお会いするのはずっとあとのことでした。本人には会わなくとも書いたものでつながる、これを学恩という。実際、着任した初日に、私は全職員を前にその論文を収めたポロポロのファイルを示し、美術館は人が繋いでいくのだという話をしました。

これはあとになって知ったのですが、芳賀前館長は退任に際して各所に出した挨拶文に、私のことをこんなふうに紹介してくださったようです。

「私の後任には、また面白い近代日本文化史研究者、木下直之氏(静岡県出身)がつくことになっております」

また？面白い？

その後も会合で何度も同席する機会があり、芳賀先生が後任者として私を紹介し、次に私が立ち上がった、「芳賀先生の後任は荷が重いものの、私のただひとつの取り柄は先生よりも話が

短いことです」と述べて笑いをとったものでした。

実際、芳賀先生の話は長く、展覧会開会式の挨拶は果てしなく続き、式次第を無視することに何ら罪悪感を覚え、現場は右往左往、宴席のスピーチは終わることを知らず、ビールから泡は消え去り、スープは冷め、刺身は干からび、しかし誰ひとりそれを止めることができない。誰をもいつまでもその話を聞いていたい気持ちにさせる稀有な人でした。泰然自若、大人にして文人の風格がありました。皮肉屋、毒舌家でもありましたが(本誌一二五号に遺言「イヤミ数ヶ条」あり)。

美術館での最後のお仕事は、二〇一六年秋に開催された「徳川の平和」展でした。早くから徳川治世が生み出した文芸や思想の豊かさに目を向け、それを「バクス・ローマーナ(ローマの平和)」になぞらえて「バクス・トクガワナ」と呼びました。

「江戸時代」だなんて無粋な名前は使

いません。従前の江戸時代観は「薩長の芋侍」(とよく口にしていました)による明治政府が作り出した暗黒の時代像であり、それでは京都の文化の奥深さ、麗しさが江戸の陰に隠れてしまう。むしろ「徳川日本」と呼ぶべきであり、決して「夜明け前」などではない。

明治四年から六年にかけて米欧諸国を回覧した岩倉使節団にも大きな関心を示され、それは「徳川文明」の到達点、すなわち凱旋門であると主張、明治政府のスローガン「文明開化」に再考を迫りました。「徳川の平和」展には明治神宮聖徳記念絵画館から教科書の挿絵で有名な山口蓬春「岩倉大使欧米派遣」を拝借せよと命じて学芸員を困らせたそうです。

その意味では、徳川家康終焉の地静岡が最後の勤務地であったことは画竜点睛であったのかもしれない。

「長い私の歴史がまつわる一冊」とおっしゃるご著書『文明としての徳川日本』(筑摩選書、二〇一七年)のあとがきは、もう言葉交わさなくなった奥様への愛情に溢れ、しみみりとさせられます。とても人間くさいのです。今は奥様と再会し、楽しい団欒の時間を過ごされていることと思います。おふたりの会話がいつまで続いても、もう誰も止めませんからご安心ください。

新収蔵品の紹介

当館では、開館以来、「十七世紀以降の東西の風景画」「静岡ゆかりの作品」などの収集方針に基づき、コレクションを集めてまいりました。二〇一九年度には、購入、ご寄贈により、十九点の作品を新たに収蔵することができました。ここでは、それぞれの作品の概要をご紹介します。

はじめにご紹介するのは、狩野雅信《花鳥図》です。雅信は幕末から明治にかけて活躍した画家で、江戸狩野派最後の重鎮です。雅信の門下には、「勝川院四天王」と称された狩野芳崖、橋本雅邦らがあり、近代日本画の礎を築いた画家を輩出したことで知られています。《花鳥図》は、雉や小禽、草花を丹念に描き込んだ大作で、未だ数点しか作品が紹介されていない雅信の貴重な作例です。

(上席学芸員 野田麻美)
次に現代美術の新収蔵品を順にご紹介します。



狩野雅信《花鳥図》
19世紀（江戸時代後期）

当館にはすでに画家・中村宏氏のご寄贈により《早来迎機・1》が所蔵されていますが、この度それに続く「2」と「3」を購入しました。《早来迎機》に表された列車のダイナミックな動きは、三点が揃うことでより強く感じられることでしょう。また、表紙に掲載した原作者の《総銅製機甲本イカルス》のご寄贈があり、当館の中村作品が充実してきました。

平成二十年度から毎年現代美術作品を継続してご寄贈いただいている太田正樹氏から、今年度は、国際的に高く評価されている韓国人アーティスト、イ・ブルの平面作品《メカメランコリア (Diluvium No.8)》と《メカメランコリア (Diluvium No.12)》の二点をご寄贈いただきました。東洋画や韓国の伝統工芸の手法を思わせる象嵌による精緻な描線と、サイバネティクス的なイメージとの組み合わせが新鮮な作品です。

また、一九五〇年代後半、地元清水を拠点に起こった前衛芸術グループ「白」の中心的メンバー、伊藤隆史《壁ノ鳥》をご遺族よりご寄贈いただきました。美術評論家の石子順造や、グループ「白」の活動の中で生み出された貴重な一点で、その表現にはルポルタージュ絵画、アンフォルメルの影響がみられます。

また、一九五〇年代後半、地元清水を拠点に起こった前衛芸術グループ「白」の中心的メンバー、伊藤隆史《壁ノ鳥》をご遺族よりご寄贈いただきました。美術評論家の石子順造や、グループ「白」の活動の中で生み出された貴重な一点で、その表現にはルポルタージュ絵画、アンフォルメルの影響がみられます。

次に、静岡市内を拠点に活動するアーティストの白井嘉尚氏から、《シャーパーベットのよう》と《Drawing by Printing》十点をご寄贈いただきました。《シャーパーベットのよう》は、パズルピース型のパーツと不定形のパーツが組み合わさったレリーフ状の作品です。カラフルな色彩と素材の組み合わせにより、変化に富んだ作品となっています。《Drawing by Printing》は、銅板に塗布したインクを、直接指や手のひらなどで拭き取り、その後紙に写し取るという工程で制作されています。版画作品ではありませんが、二つとして同じものではありません。

最後に、個人のご所蔵者より横尾忠



中村宏《早来迎機・2》1988（昭和63）年

則の「CLEAR LIGHT MAY（東京プランニング）」をご寄贈いただきました。本作は一九七四年に限定五〇〇部で販売されたカレンダーの「五月」の絵柄で、十九世紀の画家、ギュスターヴ・ドレの版画のイメージに加え、宇宙やキリスト教、ピラミッドを想起させる記号や図像が取り込まれています。一九七〇年代、西側の若者文化を席巻したニュー・エイジ運動やヒッピー・ムーヴメントなどの精神世界に共鳴した、この時期の横尾の特徴がみられる作品です。

(上席学芸員 川谷承子、主任学芸員 植松 篤)



白井嘉尚《シャーパーベットのよう》
1987（昭和62）年



伊藤隆史《壁ノ鳥》1958（昭和33）年

東京2020オリンピック・パラリンピック開催記念 美の競演—静岡県美名品展

6月13日(土)～6月28日(日)

東京2020オリンピック・パラリンピック開催を記念し、当館の所蔵品、寄託品から、珠玉の名品を十四日間限定で展示します。

美術館のコレクションは、その美術館を象徴する顔、あるいはそのあり方を語る代弁者と言えます。一九八六年の開館以来継続してきた当館の収集活動は、テーマおよび時代の幅広さが特徴です。まずテーマですが、「東西の風景画」「ロダンと近代彫刻」「静岡県ゆかりの作家・作品」「現代の美術」という四つに、静岡県という立地を鑑み、数年前、「富

士山の絵画」が新たに加わりました。これらの作品が制作された時代は、新しいところでは、正に今の美術の動向を示す現代美術から、古くは十七世紀の近世美術にまで遡ります。ジャンル別に見ると、例えば日本画コレクションは近世絵画が充実しているなどばらつきはありますが、館の収集総体としては、十九世紀以降の近代・現代の作品収集を中心にした美術館が多い日本では、異色と言えるかもしれません。このようなテーマと時代設定のもとに収集した現在のコレクション点数は、約二千七百点を数えます。本展は、これらの中から約百点を選び、その魅力を改めてご紹介します。全展示室を使ってコレクションをこ

披露するのは、当館の開館三十周年を記念して二〇一六年度に開催した「東西の絶景」展以来です。静岡県立美術館と

の展覧会にも当館のコレクションを出品する機会が増えていきます。昨年、ワシントンのナショナル・ギャラリー等で展示された円山応挙の《木賊兎図》、スペインのレイナ・ソフィア国立美術館で個展が開催された焼津出身の夭折の画家・石田徹也、そしてフランスやアメリカなどでのモネの複数の展覧会で紹介されたクロード・モネの《ルーアンのセーヌ川》。これらの作品や、若冲のほか、重要文化財の池大雅、富士山をモチーフにした和田英作など、何れも独自の美と個性が際立つ当館オールスター、強者たちの競演による祝典をどうぞご堪能ください。

なお、会期中イベントとして、企

画展で定期的で開催している「当館館長による美術講座」も実施します。併せてお楽しみください。

(席学芸員 南美幸)

■当館館長による美術講座

「江戸にゾウを見に行こう」

六月二十一日(日)

講師・木下直之(当館館長)

会場・当館講座室(定員約四十名)



クロード・モネ《ルーアンのセーヌ川》



池大雅《蘭亭曲水・龍山勝会図屏風》より《蘭亭曲水図》(重要文化財)



伊藤若冲《樹花鳥獸図屏風》(右隻)



和田英作《富士》



石田徹也《クラゲの夢》

東京2020オリンピック・パラリンピック開催記念 収藏品展 日本画コレクション 特集展示

『美の競演―静岡県美名品展』に続き、収藏品展（第七展示室）においても、オリンピック・パラリンピック開催を記念した特集展示を行います。選りすぐりの日本画による三期連続企画、どうぞご期待ください。

「きらめく日本画」

六月三十日～七月十二日
まず第一期は、きらめきをテーマにして、江戸時代から平成までの幅広い作品をご紹介します。

谷文晁《富士山図屏風》（一八三五年）は水墨を基調としていますが、稜線に施された群青が富士山に変化を与え、光を受けた一瞬のきらめきをも表現します。画面上部の深みのある金地が強い印象を与える横山大観《群青富士》

（一九一七～一八年頃 図1）。白雲を透かして見える金のかすかな輝きも、実は大事な見どころです。中村岳陵《婉膩水韻》（一九三一年）では、清流をひとり泳ぐ女性の溢れるばかりの生命の輝きが、まぶしいほどに感じられます。

墨や色彩の絶妙なコントロールによる光の表現から、心に響く生命の躍動まで。アスリートの輝く姿に目を見張り、胸躍らせるこの季節、日本画の中の多彩なきらめきにも、どうぞご注目ください。

なお、「きらめく日本画」は、『美の競演』展第七展示室を引き継ぎ、一部の作品を入れ替えて展示いたします。

（上席学芸員 石上充代）

「富士山をめぐる」

七月十四日～八月十六日
第二期のテーマは、外国人観光客も増え、更なる注目を集める富士山です。室町時代から江戸時代にかけて制作された、富士山信仰に関わる作品や、駿河、伊豆、箱根より眺めた富士山を描いた作品を展示し、富士山とその周辺をめぐる旅にお連れします。

かつて富士登山は信仰行為であり、山頂への往復だけでなく、登山道や頂上にある社寺や名所をめぐることでありました。展示予定の歌川貞秀《大日本富士山絶頂図》（一八五七年）などからは、当時の登山や信仰の様子を

うかがうこともできます。

そして各地から望んだ富士山の秀麗な姿は、格好の画題ともなりました。特に三保松原と合わせて描く例が著名ですが、本展示では、伊豆や箱根からみた富士山を描いた作品も取り上げます。大岡雲峰《日金山富嶽眺望図》（一八三九年 図2）は、多くの大名や文人が湯治に訪れた熱海を代表する景勝地・日金山（十国峠）からの壮大な眺めを元に描かれています。

これらの作品を通じて、富士山に関する歴史や信仰に思いを馳せていただくと共に、人々に愛されてきた絶景の数々をご堪能ください。

（主任学芸員 浦澤倫太郎）

「激突！東西の狩野派」

八月十八日～九月十三日
特集展示の最後を飾るのは、江戸時代に活躍した狩野派の実力者たちです。室町時代以降、京都で戦国大名や公家たちから仕事を

得ていた狩野派は、江戸時代になると、江戸幕府の開府とともに、江戸に移り

住んだ江戸狩野

派と、京都に留まった京狩野派に分か

れました。彼らは別々の道を歩み、受容層や江戸／京都の気風などの違いにも影響され、それぞれの画風を確立しました。両者は、ルーツが同じゆえに、全く異なる展開を遂げたことで、宿命のライバルとなったのです。両者は競い合うように多くの名品を生み出し、江戸絵画の歴史を彩りました。

今夏のオリンピック・パラリンピックでは、数々の宿命のライバル対決で盛り上がることでしょう。「激突！東西の狩野派」では、ライバル関係にあった東西の狩野派の画家に注目し、両者の作品を並べて展示します。両者のスタイルの違いや関係に注目し、ライバル同士の華麗なる画技の競演をお楽しみください。

（上席学芸員 野田麻美）



図1 横山大観《群青富士》当館蔵（右巻）



図2 大岡雲峰《日金山富嶽眺望図》当館蔵



図3 狩野山雪《富士三保松原図屏風》個人蔵（左巻）

カミーユ・クローデル 《自然に基づくクロッキー》に関する一考察

上席学芸員 南 美幸

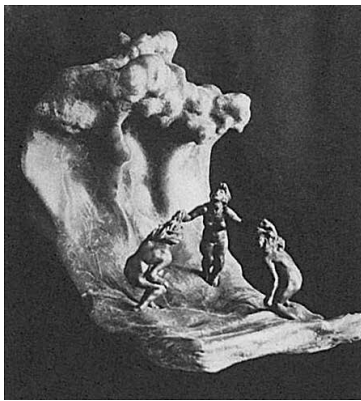


図1 カミーユ・クローデル《波》

彫刻家カミーユ・クローデル (Camille CLAUDEL, 一八六四―一九四三) の作品には、『自然に基づくクロッキー craguis d'après nature』と名づけた三点の小品がある。これらは、師・恋人であった彫刻家オーギュスト・ロダン (Auguste RODIN, 一八四〇―一九一七) から公私ともに離れ、自己の芸術の確立を目指した時期に制作された。この小論では、脱ロダンの表明とされる『自然に基づくクロッキー』の特質について考察する。

カミーユ・クローデルは、一八八〇年代前半から続いたロダンのとの関係を一八九二年頃に一旦解消し、師とは異なる自らの芸術スタイルを模索する。一八九三年末と思われる弟ポール宛の書簡で、六つの「新しいアイデア」をクロッキーおよび短い解説とともに記し、「これはもうロダンではないし、服を着ている」と、早くも脱ロダンを宣言した。ロダンからの自立は、それまで常に師との関係抜きには語られなかった彫刻家カミーユにとって急務であった。ポールへの書簡で示した紙上のプランは、その後恐らくエスキースなどの形式で制作され、カミーユはこれら「探し求めてきた小さくて新しいもの」を、美術批評家のギユスターヴ・ジェフロワにアトリエで

披露した³。ジェフロワから確かな手応えと励ましを得たカミーユは、その勧めに従い、最初の『自然に基づくクロッキー(群像)』を一八九五年の国民美術協会展に出品した。この作品は、ポールへの書簡で描出したクロッキーのひとつで、「衝立の前で、一人の言うことに耳を傾ける三人の人物」と説明した「打明け話」の構成と一致する。一八九七年、『波(自然に基づくクロッキー、石膏群像)』(図一)とともに、最初の『自然に基づくクロッキー(群像)』のヴァリアントである『おしゃべりな女たち』(図二)を、続く翌年には『もの思い(自然に基づくクロッキー、ブロンズ小像)』(図三)を、それぞれ国民美術協会展に出品した。これらは何れも、ジェフロワや文学者オクターヴ・ミルボーらから好評を博した。

三つの『自然に基づくクロッキー』には、以下の共通点が見出される。何れもロダンとは逆の方向性を指向する、主題や造形上のカミーユ独自の特質と思われる。¹⁰

- ①おしゃべりやもの思いなど、何らかの行為の最中の女性を表現。
- ②小型像であること。
- ③背景と人物像とを一体化させて視点を限定した、絵画的な空間構成。

図2 カミーユ・クローデル《おしゃべりな女たち》
1897年 44.9×42.2×39cm ロダン美術館 (S.1006.)



図3 カミーユ・クローデル《もの思い》

*図1、図3は下記より転載。なお、図3のキャプションは、下記著作では《暖炉、ひざまずく女》。1905. Paul CLAUDEL. (Camille Claudel, statuaire), *L'Art Décoratif*, no. 193.

まず「会話」や「思索」の擬人像ではなく、日常の何気ない光景の具体的な行為の描写を通じて、何らかの心理的な表現を実現しようとする『自然に基づくクロッキー』の制作態度は、先に触れたポール宛の書簡で描かれたデッサンの内容や、また当時の批評からも伺われる¹²。これはロダンの抽象化志向とは正反対である¹³。

また、小品であるということは、鑑賞者との距離を物理的にも心理的にも縮めることであり、この点も、ロダンの芸術スタイルとして真つ先に思い浮かぶ、大型の人物像による記念碑彫刻とは正反対である。

さらに、『カレールの市民』のようなロダンのモノUMENTでは、四周からの作品観賞が期待されている。一方、カミーユの『自然に基づくクロッキー』における、舞台のように人物像の背景に何かを設置する手法や、それによる鑑賞者の視点の制限は、絵画のような場面構成と絵画鑑賞における視点の在り方との類似を連想させる¹⁴。これはロダンとは全く異なる特質である。

このように考えると、『自然に基づくクロッキー』が、カミーユの表明どおり、ロダン芸術からの脱却のプロセスと結実を示すことは明らかであろう。

ところで、日常的光景から着想された《自然に基づくクロッキー》は、エドゥアール・ヴェニヤール (Édouard Vuillard, 一八六八—一九四〇) から当時のアンティミヌムの絵画との関連を想起させる。「親密な intime」という語で表されるこの絵画傾向は、「日常生活の観察から生まれ、大仰さを排して明暗の微妙なニュアンスやさりげない習慣を表現する特徴」や「室内の人々の関係性の背後にあるさまざまな日常のドラマを想像させる画面構成」を持つ。¹⁵ 《自然に基づくクロッキー》またはカミーユの表現形式を、当時「親密な／心の内奥の intime」という言葉で表した批評も少数ながらあったことや、《もの思い》が「親密な関係／親しみ／私生活／内心」を意味する《アンティミヌテ intime》の名で展示された事実は、¹⁷ 当時の絵画傾向へのカミーユの意識をうかがわせる点にも思われる。

1 《おしゃべりな女たち》《波》《もの思い》「自然に基づくクロッキー croquis d'après nature」という言葉そのものは用いられていないものの、ブタールは「辞典」の「自然」の項で、「自然に基づく描き、素描し、造形する」とは、「生きたモデルまたは対象そのものに基づく」と記し、対象の外観とその本質を捉える重要性に触れた。¹⁸ 1826. Jean Baptiste BOUTTARD. *Dictionnaire des arts du dessin, la peinture, la sculpture, la gravure et l'architecture*. Le Normant Pere, Ch. Gosselin, Paris. 十九世紀には、「書名に「自然に基づくクロッキー croquis d'après nature」を含む書籍が刊行されたが、この言葉の明確な定義はなされていなかった。1834. Jean-Pierre THÉNOT. *Traité de Perspective pratique pour dessiner d'après nature*. L'Auteur, Paris. ほかに「フィリップ・カメルチ」の著作 (一八九三年) など。¹⁹

2 BnF. Département des Manuscrits. NAF 28235. Fonds Paul Claudel. 六つのクロッキーはそれぞれ「打明け話」「食前の祈り」「日曜日」「過

ち」「ヴァイオリン弾き」(註のないクロッキー)。

- 3 一八九五年三月三日のカミーユからジェフロワ宛書簡。2008. Anne RIVIÈRE. *et al. Correspondance/Camille Claudel*, Gallimard, Paris, no. 80.
- 4 一八九五年四月と思われるカミーユからジェフロワ宛書簡。2008. RIVIÈRE. *op. cit.* no. 85.
- 5 一八九五年四月と思われるカミーユからジェフロワ宛書簡。2008. RIVIÈRE. *op. cit.* no. 86.
- 6 1895. Exposition nationale des beaux-arts. *Catalogue illustré des ouvrages de peinture, sculpture, dessins, gravure, objets d'art et architecture*. Typographie et Chameroi et Renouard, Paris. 出品作の石膏は現在消失。
- 7 1897. Exposition nationale des beaux-arts. *Catalogue illustré des ouvrages de peinture, sculpture, dessins, gravure, objets d'art et architecture*. E. Bernard et C^{ie}. Impimeurs-Éditeurs, Paris. 出品作の石膏は現在消失。
- 8 作品名のほか、材質をブロンズとオニキスに変更。
- 9 1898. Exposition nationale des beaux-arts. *Catalogue illustré des ouvrages de peinture, sculpture, dessins, gravure, objets d'art et architecture*. E. Bernard et C^{ie}. Impimeurs-Éditeurs, Paris. 出品作のブロンズは現在消失。
- 10 三つの《自然に基づくクロッキー》は、共通点だけではなく、それぞれが異なる印象を与えるようにも思われる。《おしゃべりな女たち》と《波》は、カミーユがポールに明言した着衣ではなく裸体であり、動きの瞬間を捉えた動的な群像は、力強い動きのヴァリエーションによって人物像の感情を表現したロタンの造形スタイルと関連する。顔立ちなどの細部の省略、以前用いた部分の再利用など、ロタンと共通する特徴である。一方《もの思い》は着衣の単体像で、タイトルとおり静かな構図である。だがこれらの点は、本文で示すような、ロタンからの離脱を示す傾向を妨げるものではないと思われる。ポールへの表明に反して裸体像である点については、今のところ資料は見当たらないもの、今後検討を続けた。
- 11 《おしゃべりな女たち》の衝立、《もの思い》の暖炉、《波》の高波。《おしゃべりな女たち》には

衝立のないヴァリエーションもあるが、「打明け話」の説明から、衝立は元々のプランにあったと思われる。

- 12 例えばモラルは、これらが「何らかの出来事、偶然、通りがかりに観察された動き」であり、《おしゃべりな女たち》には「同じ感情の高まり、同じ不安が入り込む」と記した。^{1898. Mathias MORHARDT. (Mlle Camille Claudel), *Mercure de France*, mars, pp. 709-755.}
- 13 葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」の影響が指摘される《波》は、他二作に比して抽象度が高い。
- 14 その意味では、演劇的とも言える。
- 15 二〇一三. 福田 (寺嶋) 美雪「十八世紀のフランス絵画と文学における「親密な生活」の表象」フランス文化研究「四四号、獨協大学外国語学部、四五—七一頁。
- 16 例えばジェフロワは、《おしゃべりな女たち》の「一人が何かの話をし、残りが耳を傾ける」様子を、「親密な真実の発露」と述べた。^{1895. Gustave GEFROY. (Salon de 1895. La sculpture au Champ-de-Mars), *La Vie Artistique*, 4^e série, p. 225. また、その《自然に基づくクロッキー》のヴァリエーションが出品された一九〇五年のウジエーヌ・プロ画廊での展覧会の際、「カミーユ・クロアール嬢は、我々を非常に親密かつ人間的な方法で、自然主義と理想が結びつく芸術に向き合わせ」¹⁷、そのことが「彼女を巨匠たらしめる」と高評価した者もいる。^{1905. Andrée MYRA. *Le Petit Quotidien*, 10 décembre, 3^eらにカミーユの最大の理解者である弟ポールが、「内部の／精神的な intérieur」を用いて、姉を「室内彫刻の最初の職人」と呼び、その作品を「内的な思考の記念碑」と評し、大作かつ物質的な彫刻家としてのロタンに位置させたことも示唆的である。^{1905. Paul CLAUDEL. (Camille Claudel, statuaire), *L'Occident*, août, Paris.}}}
- 17 一九〇五年のウジエーヌ・プロ画廊での展覧会。



本の窓
セルマ・ラーゲルレーヴ作
菱木見子訳
『ニルスのお話』
福音館書店 二〇〇七年

妖精トムテによって小人に変えられた少年・ニルスのお話を知ったのは、子供の頃のテレビアニメを通してのこと。最近になって、その原作が、ノーベル文学賞を受賞したスウェーデンの代表的作家による、百年以上前の小学校の地理の教科書であることを知りました。急激な近代化で変わりゆく祖国の姿を子供たちにどう伝えるか、切実な課題に作家として最上の形で応えたのが本書だったので、ニルスがガンの群れと共にスウェーデン中を旅する冒険物語を骨格に、各地の自然風土、歴史、伝説などが幅広く丁寧に、深い洞察に基づいてちりばめられ、自然保護や地方の多様性の尊重など、現代の私たちの課題をも先取りする内容を含んでいます。ほかのアニメとはどこか風合いの違う、子供の頃の不思議な印象が、原作を読むことで腑に落ちました。最後の浮世絵師・小林清親の娘として父に関する貴重な著作を残した哥津が、下巻を初めて邦訳 (大正八年) していたことにも驚かされます。底知れぬ魅力を秘めた本です。

(上席学芸員 石上充代)

作る楽しさを共有できる場所

エデュケーショナルスタッフ 馬場夢乃

静岡県立美術館とえば、子供の頃には学校行事で訪れたり、また大人になってから気になる展覧会に足を運んでみたりと、静岡県に長く暮らしている人なら幾度か訪れる機会のある場所なのではないでしょうか。私自身も、幼少の頃より最も縁のある美術館の一つでした。美大で絵画を学ぶ為、大学の間だけ静岡を離れていましたが、帰郷してから再び不思議とご縁があり、現在、静岡県立美術館の実技室担当スタッフとして勤務しています。

美術館に勤め始めるまでは、作品は自身と向き合いながら作るものであり、特に学生時代は、自分で作品を作る時間が何よりも楽しく、そして長かったように思います。今でも自身での制作が楽しい事には変わりありませんが、美術館のスタッフとして勤務する中で大きく変わっていった事



木版画講座の様子

は、自分で作る事の楽しさと同じくらい、誰かの制作の手助けになれる事が楽しいという事です。静岡県立美術館の実技室では、誰でも自由に制作活動ができるアトリエとして実技室を開放している、「創作週間」を毎月開催しています。「創作週間」の期間は老若男女問わず、本場に色々な方にご利用いただいております。初めての方も、常連でいらしている方の中には、もう十年近く通われている方もいます。また、実技室では、日本画や銅版画、木版画などの専門的な技法を学べる「実技講座」も年に数回開催しています。この一年間実技室の仕事を務める中で、そんな実技室プログラムへの参加がきっかけで制作を始めたという方に何人かお会いしました。初めて一から技法を学び実践するという事は、予想外の失敗もあり、思い通りにならない事も多いです。しかし、その中でふと成功した瞬間の喜びは本当に大きく、そんな時、作る楽しさを美術館スタッフとして、少しでも伝える事ができたのかなと嬉しく思います。

是非、静岡県立美術館の実技室が、これからも制作活動をする人の支えの場として、そして新たに制作にチャレンジする方への着火剤となるような場所として、続いてほしいと願っています。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日・振替休日の場合は開館し、翌日休館)。
ただし、9月23日(水)は休館。5月7日(木)、8月11日(火)、11月2日(月)は開館。

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

無料託児サービス
毎週日曜日、4月29日(水・祝)、5月5日(火・祝)10:30～15:30
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

2020年度収蔵品展スケジュール

新収蔵品展

4月7日(火)～5月31日(日)

東京2020オリンピック・パラリンピック開催記念
きらめく日本画

6月30日(火)～7月12日(日)

東京2020オリンピック・パラリンピック開催記念
富士山をめぐる

7月14日(火)～8月16日(日)

東京2020オリンピック・パラリンピック開催記念
激突！東西の狩野派

8月18日(火)～9月13日(日)

曾宮一念とその時代

9月15日(火)～11月15日(日)

耳をすませて一音と楽器のある風景

11月17日(火)～2021年1月24日(日)

日本戦後美術の挑戦

2021年1月26日(火)～4月4日(日)

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。